

続

徒然
つれづれ

エコ・エゴ・メタボ

桑野 巍

「先進国住民の落とし穴はきれい社会だ」を力説する医学者の話に思わず耳を傾けた。彼は免疫学専攻で若いころから毎年インドネシアのカリマンタン地方を訪ね、その子どもたちを観察してきたという。子どもたちは年中泥んこ遊びに興じているが、目が輝いているし肌がつやつやしてアトピー現象など見られないという。食べ物は穀類、野菜、果物が中心らしい。ここの子どもたちを原始人というかというそうではなく、彼らは自然と触れ合い免疫力を自分たちで作っているそうだ。

これに比べ日本人はあまりにも清潔感が強すぎるし、抗菌・除菌グッズに囲まれて生きているし神経質すぎるから逆にストレスが貯まって可愛そうだと彼は嘆く。いま日本人のいちばんの悩みは物があふれている状態で、ほしい物がいつでも手に入るのに不満ばかりを口にしていて「生活態度は最悪」と彼は力説した。「ぜいたくは敵」とは言わなかったが、買い物か唯一の趣味を自認する人が多く「自分は何と安っぽい人間と思っているのではないか」とお見通しだった。

医学者のものの見方を参考にして、わが身はどうかを問い「自分は社会と距離を置いていないか」との思いを反復させながら自分流の考え方をまとめてみようとした。ところが頭の中は「ああでもない。こうでもない」が去来して半ば支離滅裂状態だ。それでも自分を取り巻く環境を考えながら、自分流のエコ生活に挑戦してみようという勇気だけが湧いてきたから不思議だ。

世はエコの時代というが「個人の努力には限界がある」「いえいえ塵も積もれば…」「どのみち汚染は防止できない」など“浄化思想”はいろいろだ。具体的にごみの減量、電気使用量の削減、公共交通機関の利用ぐらいで究極のエコ対策に役立つかどうか、アイデア発想の乏しさを嘆いてしまった。細かいことこそ大事なのに脳裏には大きなことが浮かんでしまう習癖が抜け切らず「100年前の日本人の生活様式はどうだったのか。その時代に戻れるのか」とか「発展途上国の人口増と資源需要増は」などグローバルな問題点や社会現象の方に目が行ってしまうからたちが悪い。

自治体やメディアが騒いでいるコンビニの終夜営業規制や自動販売機の規制などでCO₂の排出量が大幅に減るとは考えられないが、騒ぐことによって国民のエコ意識が高まるという効果には期待したい。それでは一般消費者は便利機能を犠牲にすることができるか—となると、ここが問題だ。消費者の多くは便利社会のあと戻りなど考えず、もっと便利な社会にならないかを追い求めているのだから。

人類は化石燃料など地下資源を地中から取り出し、これを化学変化させることによって地球という星に負荷をかけてしまったことは分かっているが、規制・抑制は大嫌い派が大多数で、便利社会を謳歌してきた。経済発展優先の論理が横行し、アクセルを踏み続け地球環境をズタズタにしてきたのは人間たちのエゴでエコ悪化の加害者だった。地中のエネルギー資源より地上の太陽光、風力、植物などのエネルギー資源開発の方向に向かっているのが“人間の知恵”というなら私は大賛成だ。

過去の職業柄か私はテレビのニュースは見るが情報バラエティ番組などはあまり見ない。かりそめの情報が多いからだ。たまに目に入る食べ放題の映像には「天下の公器がよくもこんな番組を作るものだ。頭の悪さを競っているのか」とさえ思う。物を大切にしない人たちは自分をはかない人間とは思わないのだろうかというテレビ批判に走ってしまう。

それにしてもテレビのチャンネルは多過ぎるし、放送時間も長過ぎる。受け手側の要望もあろうが、エコ生活に反するテレビの送受双方ともメタボリック病状態で救いようがない。いうならばエコと向き合っているのではなく、テレビそのものが自らのエゴ丸出し状態といわれても仕方がないだろう。

大都市の超高層ビルや高速道路網は便利だが反エコ建造物で、大都市メタボ現象を象徴している。緑の公園や水の自然が少ないからエコにはほど遠いのが気懸かりだ。このまま大都市がエコを粗末にすれば成長が止まり、間違いなく大都市は衰退に向かうだろう。

(自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長)